

令和6年度(第75回)芸術選奨
選考経過

令和6年度(第75回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として19名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があった。いずれも伝統演劇から現代演劇まで、第一線で活躍する俳優・演出家らばかりである。 第一次選考審査会では選考審査員それぞれが推薦理由を述べ、忌憚(きたん)のない意見が交わされた結果、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞7名まで候補者を絞り込んだ。 第二次選考審査会では、選考審査員たちが更に所見を述べ令和6年の舞台での実績・将来性を検討するなど議論を深めた。いずれも甲乙つけがたい候補者の中から、古典から現代劇までその存在感が観るものに強い印象を遺(のこ)す浅野和之氏、歌舞伎の脇役として時代物・世話物問わず近年頓(とみ)に円熟味を増している坂東彌十郎氏の2名が文部科学大臣賞に選ばれた。文部科学大臣新人賞には、大胆かつ繊細な演技で演劇のみならず映像でも幅広く活躍する江口のりこ氏、ミュージカルからシェイクスピアまで、その切れ味鋭い演出で期待される藤田俊太郎氏の2名が選ばれた。
映画	映画部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として12名が推薦された。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞候補者3名、文部科学大臣新人賞候補者5名を最終候補として絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。 文部科学大臣賞は、監督、俳優、スタッフそれぞれの功績を吟味しながら、各選考審査員が自身の推薦する候補者について補足説明を行い、それ以外の候補者についても所見を述べ、議論が重ねられた。議論の結果、平成9年に製作が開始されたものの撮影直前に頓挫した「箱男」を諦めず素晴(すば)らしい作品へと結実させた映画監督の石井岳龍氏、また、丁寧な取材で「津島 福島は語る・第二章」を作り上げたジャーナリストで映画監督でもある土井敏邦氏を評価し、両名を選出することになった。 文部科学大臣新人賞は、「ナミビアの砂漠」「あんのこと」でその演技が国内外で高く評価された俳優の河合優実氏、最新作「夜明けのすべて」で脚色力と繊細な演出力を見せつけた映画監督の三宅唱氏を選出した。
音楽	音楽部門には選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補に11件、また文部科学大臣新人賞にも11件の推薦があった。まず第一次選考審査会において、選考審査員及び推薦委員からの推薦用紙及び口頭における意見を踏まえ、文部科学大臣賞に3件、また文部科学大臣新人賞に4件が候補として絞り込まれた。 更なる業績確認を踏まえて開催された第二次選考審査会においては、活発な議論と公正な審査の結果、文部科学大臣賞2名、文部科学大臣新人賞2名が選出された。 阪哲朗氏はオペラ及びコンサートの双方で、長年のドイツでの活動で鍛えた実力を遺憾なく発揮した。岡村慎太郎氏は自身の主催による演奏会において、考え抜かれた選曲と多彩な演奏により、地歌箏曲演奏家(じうたそうきょくえんそうか)の第一人者にふさわしい演奏を聴かせた。 文部科学大臣新人賞の北村朋幹氏は録音と演奏会の双方で、極度の集中力と説得力ある解釈を聴かせた。長谷川将山氏は都山流(とざんりゅう)の古典から現代曲に至るレパートリーで圧倒的な技巧により鮮烈な印象を与えた。
舞踊	舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として13名、文部科学大臣新人賞候補者として13名の推薦があった。古典作品では正確に伝承しつつも現在の視点で作品を表現しているか、一方、現代舞踊などでは同時代の感性で表現できているかなど慎重に審議し、第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞4名に候補者を絞り込んだ。 第二次選考審査会では、今後の舞台芸術にどのように影響を与えるかなども含め、更に審議を深めていき候補者を絞っていった。その結果「第7回尾上紫リサイタル—花—」における完成度が高い舞台の評価で推薦の多かった尾上紫氏がまずは文部科学大臣賞に選出された。続いて「ザ・カブキ」「ロミオとジュリエット」ほかでドラマチックな演技と高い技術が評価され柄本弾氏が選出された。文部科学大臣新人賞は、スズキ拓朗氏が「おどるシェイクスピア」で著名な演劇作品を現代の視点で読み解き、同時代性と独創性を強く感じられる公演をしたことが高く評価され満場一致で選出。続いて中村鷹之資氏は日本舞踊の演者としても「第九回翔之會」を魅力ある舞台に仕上げ、将来性を感じられたことが高く評価され、同じく満場一致で選出された。

令和6年度(第75回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
文学	文学部門では選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として14名、文部科学大臣新人賞候補者として13名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は6名に候補者が絞られ、第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。 文部科学大臣賞には「廃屋の月」の野木京子氏、「私の小説」の町屋良平氏が選ばれた。野木氏の詩集は生死の境目の荒涼とした風景を捉えつつ、はっとするようなイメージの飛躍とともに言葉に命を吹き込む魔法のような力があった。町屋氏の短編連作は、意識の暗がりを行きつ戻りつしながら小説執筆の息遣いを伝える作品で、諦観と笑いの奇妙な混淆(こんこう)にも注目が集まった。 文部科学大臣新人賞には、「鷗(かもめ)」の西村麒麟氏と「無形」の井戸川射子氏が選ばれた。西村氏の句集は、飛翔(ひしょう)の軽みを鮮やかに表現し、新時代の俳句の潜在力を示した。井戸川氏の長編小説は超絶技巧とも言える驚くべき手際で、団地の人間模様を描き出しながらも主観や感覚の細部へ末端へと叙述を展開、鮮烈な発見感とともに世界の根源をまぶしく現出させ、高い評価を得た。
美術A	美術A部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者11名、文部科学大臣新人賞候補者17名が推薦された。第一次選考審査会では、候補者について推薦理由及び資料を基に審議した上で、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞5名に絞り込まれた。第二次選考審査会では、今一度、選考審査員がおのおの絞り込んだ作家について推薦理由を述べるとともに討議を繰り返し、複数回の投票の結果ほぼ全員一致により、文部科学大臣賞に石田尚志氏、塩田千春氏の2名が、文部科学大臣新人賞に青山悟氏、笹井史恵氏の2名が決定した。 石田氏はドローイング・アニメーションの手法や映像の作品で知られてきたが、今回の展示では自身の原点である絵画へと落とし込むことへの探求が評価された。ベルリン在住の塩田氏は郷里大阪での初めての大規模個展において「つながる」ことを通して「生」の圧倒的な強さを見せた。青山氏は機械刺繍という表現媒体が持つ多角的視点を背景に、単なる絵画にとどまらない社会的メッセージを発信し続けている。笹井氏は伝統的技法を駆使しながらもその特異な形体と絶妙な調色によって、軽やかなる現代の漆芸表現を切り拓(ひら)いた。
美術B	美術B部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者11名と文部科学大臣新人賞候補者11名が推薦された。第一次選考審査会では、候補者の作品や活動及び推薦理由について、活発な意見交換と審議を経て投票を行い、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について、美術B部門としての展望と理解を深めながら意見交換と慎重な審議を行い、各2回の投票を経て、文部科学大臣賞は開発好明氏と金築浩史氏、文部科学大臣新人賞は金仁淑氏とNerholを選出した。文部科学大臣新人賞の投票では同数が続き苦慮したが、推薦者数を根拠とした判断に至った。 開発氏は30年にわたる多層な作家の全体像において、社会への誠実な対峙(たいじ)を示し得たこと、金築氏は展覧会を支える創造的な技術と姿勢への信頼と、多岐にわたる貢献が高く評価された。金氏は旺盛で真摯な取材力による作品の完成度の高さが、Nerholは対話によって表現領域を複合し、横断していくスタイルの独自性が今後の期待とともに高く評価された。

令和6年度(第75回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
メディア芸術	メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補14名、文部科学大臣新人賞候補14名が推薦され、第一次選考審査会で文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞7名に絞られた。 第二次選考審査会では、文部科学大臣賞候補として、多くの委員が青山剛昌氏の「名探偵コナン」を挙げ、長年にわたり一流のエンターテインメントを世に送り出してきた氏の功績を称(たた)え、ともに、連載30年の節目として今年授賞する意義を確認し、文部科学大臣賞を決定した。また、桜井政博氏の「桜井政博のゲーム作るには」に対して、賞の対象や当分野での“作品”の定義について活発な議論が交わされ、現在の視聴者をターゲットとしたYouTubeチャンネルとしての意義と、教育・啓蒙(けいもう)コンテンツとしての各話のクオリティの高さ、全260話全体の設計の巧(たく)みさ、過去作品のアーカイブの有効な利用法などから、多くの選考審査員が当コンテンツを高く評価し、もう一つの文部科学大臣賞となった。 文部科学大臣新人賞は、それぞれの分野から候補者が挙げられた結果、マンガの原作を生かしつつ、アニメーションならではの表現を追求した作品「ルックバック」で大きな話題を呼んだ押山清高氏と、日本のマンガ・アニメ文化に立脚したテンポ感や動き、ストーリーテリングをゲームに活(い)かし、独自のJRPGを打ち立てた、橋野桂氏に決定した。
放送	放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補に12名、文部科学大臣新人賞候補に8名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の活動についての多角的な議論を行い、文部科学大臣賞候補に推薦のあった1名については、これまでの受賞歴、また年齢が40代とまだ若いことから文部科学大臣新人賞候補として扱うこととし、文部科学大臣賞候補6名、文部科学大臣新人賞候補4名に絞った。 第二次選考審査会では、まず、文部科学大臣賞について、選考審査員に第一次選考審査会で絞った候補者の中から改めて推薦してもらい、全ての選考審査員の意見が一致する形で、テレビドラマで活躍する俳優・阿部サダヲ氏と、ドキュメンタリーを手掛けてきたプロデューサーの村瀬史憲氏を文部科学大臣賞に決定した。続いて、文部科学大臣新人賞に関しても同様の審査作業を経た上で、ディレクターの大島隆之氏と上田大輔氏を文部科学大臣新人賞に決定した。両氏とも、ドキュメンタリー系番組の制作での活躍を評価しての選出となったが、こちらも選考審査会に出席した全ての選考審査員の意見が一致しての結果であった。
大衆芸能	大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者11名、文部科学大臣新人賞候補者14名の推薦があり、第一次選考審査会で文部科学大臣賞の候補者を6名、文部科学大臣新人賞の候補者を8名に絞り込んだ。 文部科学大臣賞は落語家、講談師と歌手や作曲家などの多彩な候補者が揃(そろ)った。活動実績と推薦理由に基づき選考審査員によって議論がなされた結果、芸歴40周年の節目を迎え、東京と大阪で10か月連続の記念公演を行い、大きな成果を見せた落語家の立川談春氏と、古典と新作の二刀流で人気を博し、全国各地を回る一方で寄席への出演も欠かさず、様々な挑戦を行っている同じく落語家の柳家喬太郎氏が選ばれた。 文部科学大臣新人賞は落語家、活動写真弁士、講談師、漫才師、音楽家ら多種多様な候補が並んだ。活況を見せる多くの才能は甲乙つけ難く、候補者各人の業績などについて多面的で熱い議論が重ねられた結果、活動写真弁士として異才を放つ坂本頼光氏と、映画音楽なども手掛け、将来を大いに囑望される作曲家の渡邊琢磨氏が選出された。

令和6年度(第75回) 芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	芸術振興部門は、文部科学大臣賞14名、文部科学大臣新人賞13名の候補者推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は6名に絞られ、第二次選考審査会での討議となった。他分野での評価が難しかったり、裏で芸術を支えているために目が向きにくかったりしていたクリエイターやプロデューサーなど、広い視野の下での推薦があり、検証にも多様な視点が必要とされた。そして討議の場では、国内の芸術活動を世界に広めたことや、芸術による社会貢献をした活動への評価が共有された。最終的に文部科学大臣賞は、能登半島地震の被災地支援に音楽活動で尽力した指揮者の広上淳一氏と、舞台芸術の国際交流を推進したディレクターの丸岡ひろみ氏に決定した。また、文部科学大臣新人賞は若手アーティストの支援を独自の手法で実施した小川希氏と、ビジネス面での障害者アートの社会への定着を図るために賞を創設するなどした松田崇弥氏・松田文登氏に決定した。本部門の表彰が、既存の芸術の枠組みにとらわれない人材の顕彰に寄与できれば幸いである。
評論	評論部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として23名、文部科学大臣新人賞候補者として18名が推薦された。第一次選考審査会では、推薦書類の内容を吟味しつつ慎重に審議を行い、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、各候補者の著作について真摯な議論を交わし、文部科学大臣賞に有木宏二氏と片山杜秀氏を選出した。有木氏の「ゴーガンと仏教」は、ゴーガンの画業に仏教思想の深い浸透を見えるという野心作で、その洞察を稠密(ちゅうみつ)な実証が裏付けている。片山氏の「大楽必易―わたくしの伊福部昭伝―」は、映画「ゴジラ」の音楽で著名な作曲家の全体像を、主に伊福部本人の談話を基に構成した労作である。 文部科学大臣新人賞は、高橋義彦氏と林淳氏に決定した。高橋氏の「ウィーン1938年最後の日―オーストリア併合と芸術都市の抵抗―」は、ナチスドイツによる併合前後のオーストリアを舞台に政治・文化の大立者(おおだてもの)が交錯する群像ドラマを巧緻に描き、また、林氏の「いびつな「書」の美」日本の書がたどった二つの近代化」は、日本の書を革新派と伝統派に大別して説得力豊かな透視図を築き上げ、ともに高い評価に値する。